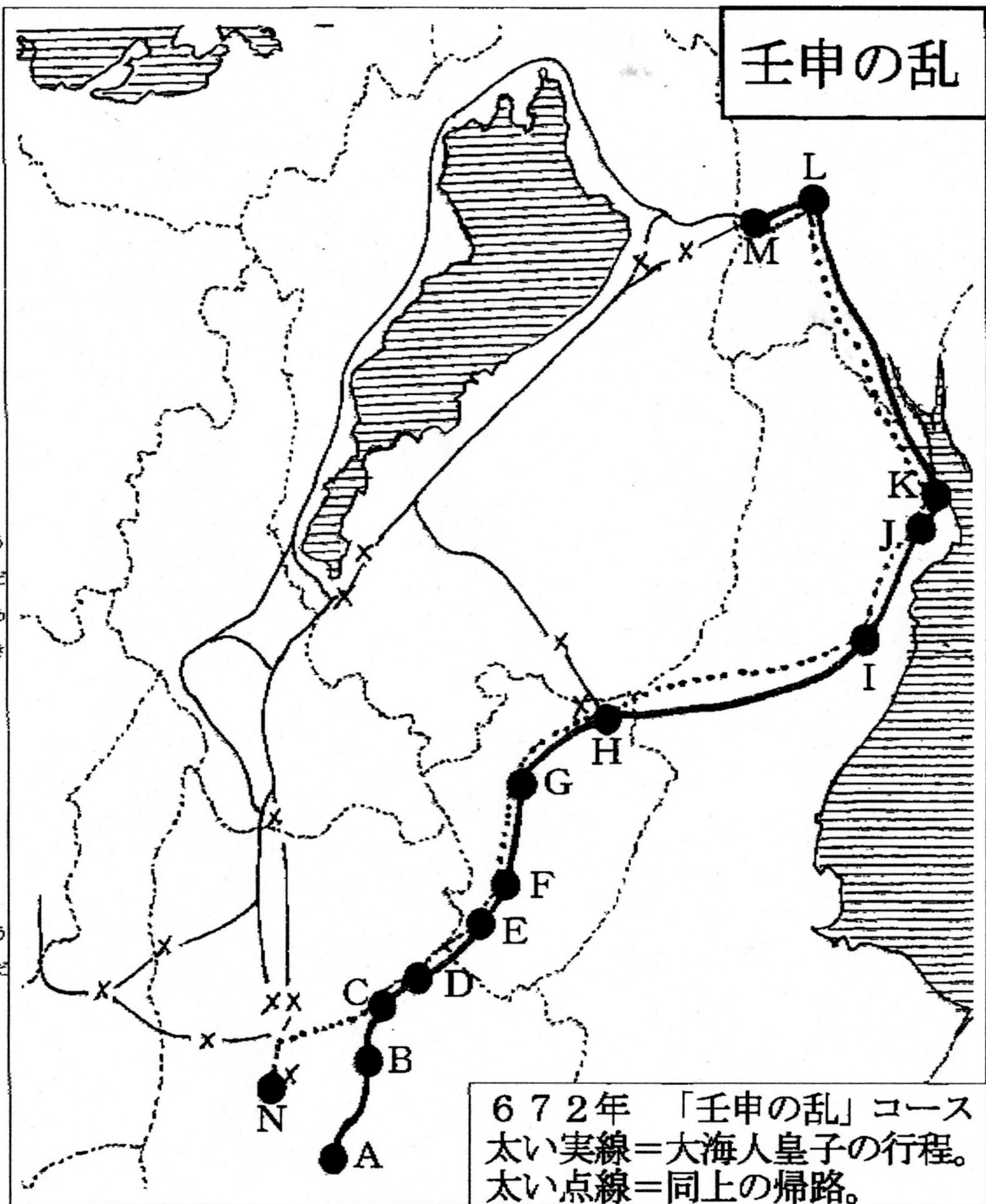


伊勢と万葉——壬申の乱と聖武行幸——

【二つの行程図から】

壬申の乱



672年「壬申の乱」コース  
太い実線=大海人皇子の行程。  
太い点線=同上の帰路。

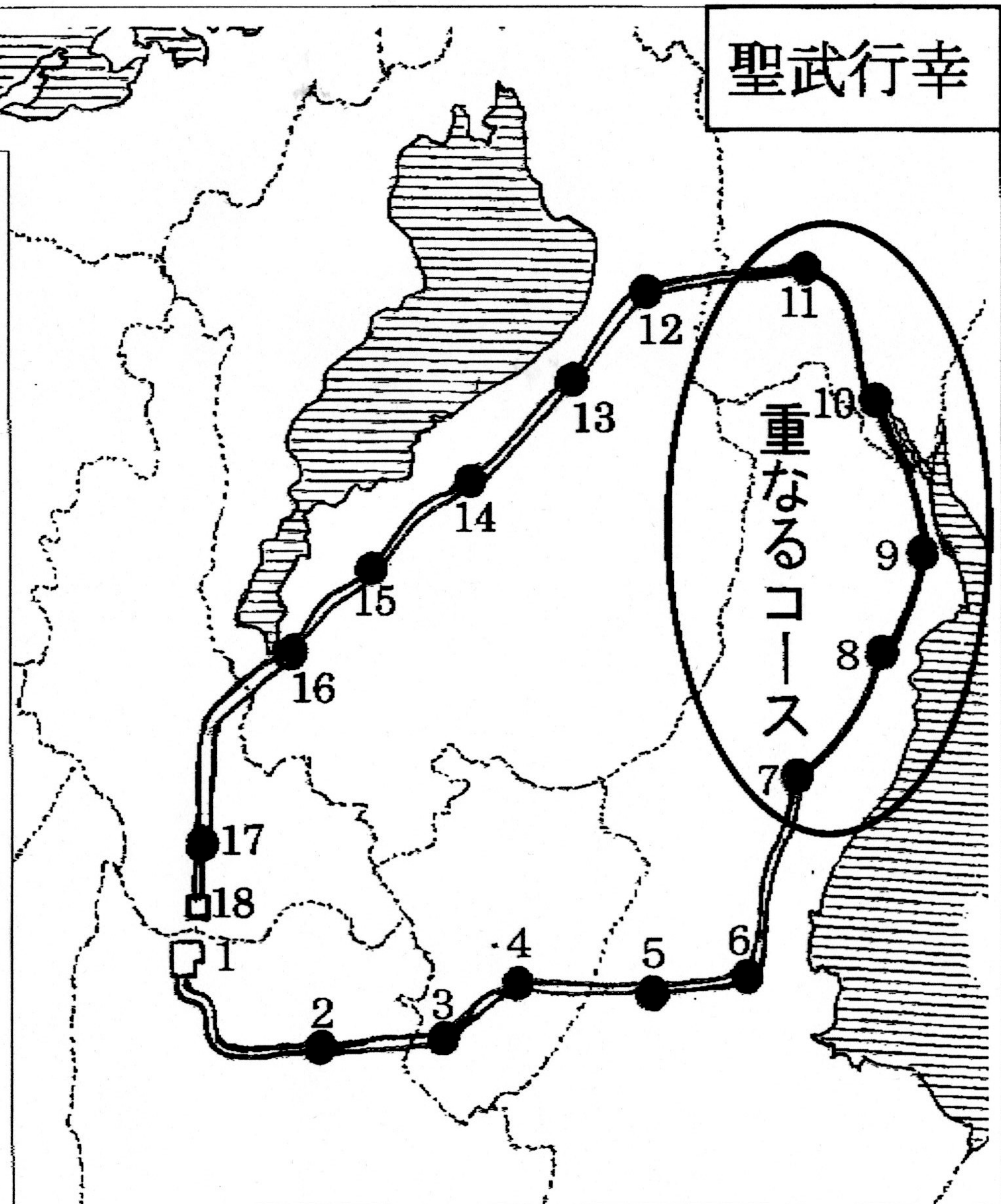
A || 吉野、六月二四日発。 B || 菟田吾城、二四日。 C || 菟田郡家、二四日。 D || 大野、二四日。 E || 隱郡、二四日。 F || 横河、二四日。 G || 伊賀郡家、二四日。 H || 積殖山口、二五日。 I || 三重郡家、二五日。 朝明の迹太川で天照大神を望拜、二六日。 J || 朝明郡家、二六日。 K || 桑名郡家、二六日泊。 L || 不破郡家、二七日。 M || 野上行宮、六月二七日。

〔帰路〕 M || 野上行宮、九月八日発。 K || 桑名、八日泊。 O || 鈴鹿、九日泊。 O || 阿閉、一〇日泊。 E || 名張、一二日泊。

N || 倭京嶋宮、一二日泊。 N || 岡本宮、九月一五日。』

『日本書紀』による。

聖武行幸



740年 聖武天皇の関東行幸コース  
 太い実線=壬申の乱での大海人皇子と重なる行程。  
 二重線=大海人皇子の行程とは重ならないコース。

- 1 平城宮、一〇月二九日発。
- 2 堀越頓宮、二九日泊。
- 3 名張郡家、三〇日。
- 4 伊賀安部頓宮、十一月一日泊。
- 5 志志河口頓宮、二〜二日。
- 6 志志郡家、二〜三日泊。
- 7 鈴鹿赤坂頓宮、一四〜二日。
- 8 朝明郡家、二三〜二四日。
- 9 桑名石占頓宮、二五日泊。
- 10 美濃国当伎郡家、二六〜二九日。
- 11 不破頓宮、一二月一〜五日。
- 12 近江国横川頓宮、六日泊。
- 13 犬上頓宮、七〜八日。
- 14 蒲生郡家、九日泊。
- 15 野洲頓宿、一〇日。
- 16 禾津頓宮、一一〜一二日。
- 17 山背国玉井頓宿、一四日。
- 18 恭仁宮、一二月一五日、始作京都(みやこ)。

【重なるコースは約三分の一】

聖武天皇の企図に久迹京遷都があつたが、出発二日前の発言に「関の東に往く」と記されており(『続日本紀』)、鈴鹿関以東への行幸は当初からの計画的な行幸コースであつた。彷徨ではない。

しかし大海人皇子の壬申の乱コースと重なるのは三分の一弱のみ。

聖武天皇は当初、伊勢大神宮参拝を想定したものか。

2

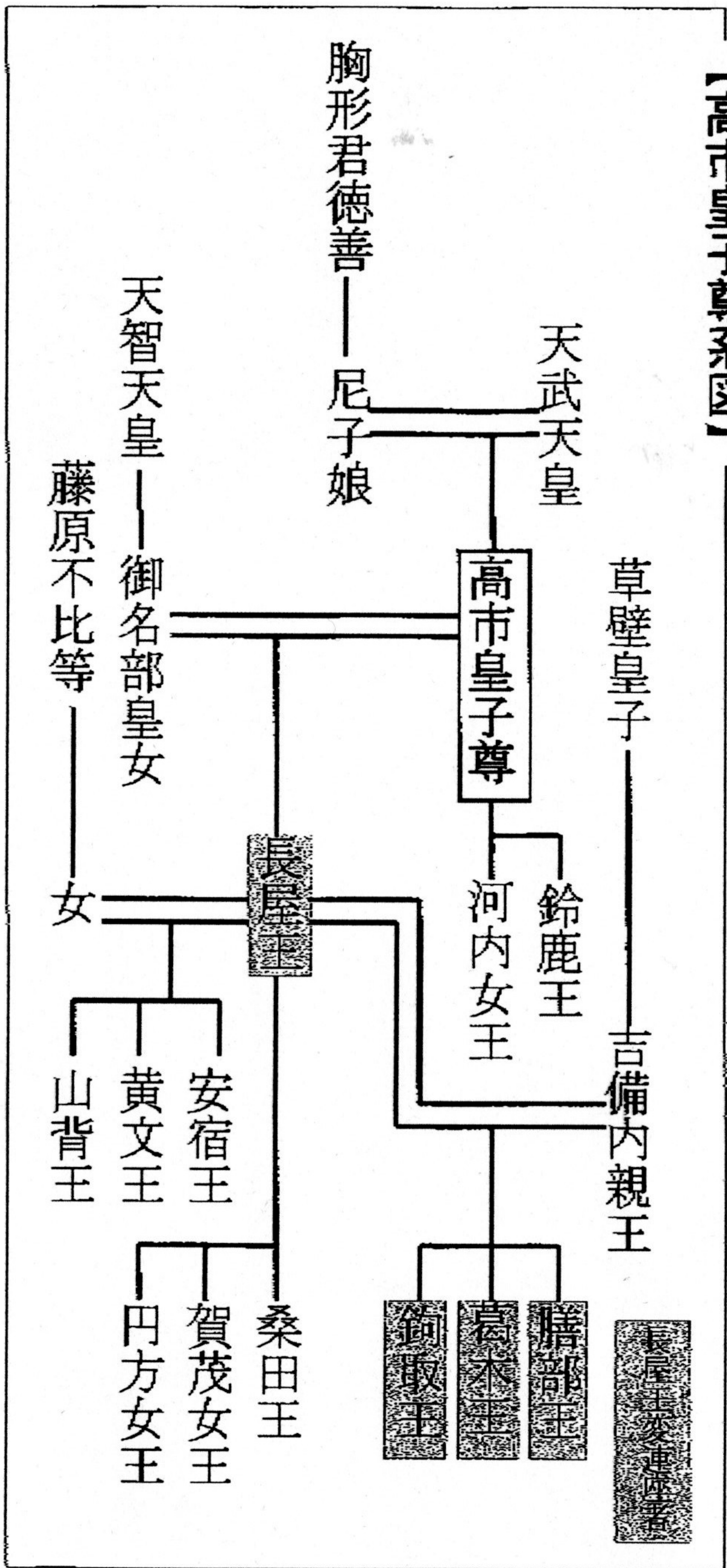
『続日本紀』による。

『萬葉集』に見られる「壬申の乱」

六七二年六月二十二、二十四日〜七月二十二日（瀬田での決戦）  
『日本書紀』卷第二十八（天武天皇上）——「壬申紀」

A、人麻呂の高市皇子尊への殯宮挽歌（プリント④）

【高市皇子尊系図】



【高市皇子尊】 生没（六五四——六九六）

壬申の乱 六七二年 戦を勝利に導く大功（推定、十九歳）。  
持統四年 六九〇年（二月、持統天皇、即位）。七月、太政大臣。  
持統十年 六九六年 七月十日、薨去（「後皇子尊」『紀』。四三歳か）。

B、壬申の乱後の歌として（次の二首）

——現人神の表現——

壬申年の乱、平定以後の歌、二一首。

皇は神にし座せば赤駒の腹ばふ田るを京師となしつ

（19・四二六〇、大伴御行）

大王は神にし座せば水鳥のすだく水ぬまを皇都と成しつ

（19・四二六一、作者未詳）

高市皇子尊の城上殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂の作れる歌、一首。短歌并せたり。

掛けまくも 忌しきかも 言はまくも 綾に畏き 明日香の 真神

の原に 久堅の 天つ御門を 懼くも 定め賜ひて

神さぶと 磐隠り座す 八隅知し 吾が大王の

聞こし見す 背とももの国の 真木立つ 不破山越えて

天の下 治め賜ふと 食す国を 定め賜ふと

鶏が鳴く 吾妻の国の 御軍士を 喚し賜ひて

千磐破る 人を和せと 奉仕はぬ 国を治めと

皇子随ら 任し賜へば

大御身に 大刀取り帯かし 大御手に 弓取り持たし

御軍士を あどもひ賜ひ

斉ふる 鼓の音は 雷の 声と聞くまで

吹き響せる 小角の音も 敵見たる 虎か叫吼ゆると

諸人の 協ゆるまでに 指挙げたる 幡の靡きは

冬木盛り 春去り来れば 野毎に 著きて有る火の

風の共 靡くが如く 取り持てる 弓はずの驟き

み雪落る 冬の林に 鷹かも い巻き渡ると

念ふまで 聞の恐く 引き放つ 箭の繁けく

大雪の 乱れて来れ 奉仕はず 立ち向ひしも

露霜の 消なば消ぬべく 去く鳥の 相競ふ端に

渡会の 斎宮ゆ 神風に い吹き惑はし

天雲を 日の目も見せず 常闇に 覆ひ賜ひて

定めてし 水穂の国を 神随ら 太敷き座して

八隅知し 吾が大王の 天の下 申し賜へば

a 主語である 天武天皇の 提示

b 天武天皇の 関ヶ原への 行軍

c 天武天皇から、 高市皇子尊への 全軍統率の一任

d 高市皇子尊 の登場

e 戦闘場面 の描写

f 神風による 勝利平定と 天武天皇の 治世

(2・一九九—前半部—「二云」を省略)

f 渡会の齋宮ゆ 神風にい吹き感はし

伊勢神宮から神風が吹いたというのである。「齋宮」は齋王宮の場合には「いつきのみや」と訓み、伊勢神宮の場合には「いはひのみや」と訓む(西宮一民氏「齋宮」の訓義)同氏『上代祭祀と言語』所収)。ここは「いはひのみや」(内宮)になる。「神風」は夏台風。夏台風は、気圧バランスから、往々にして迷走台風や停滞台風になる。ここはその停滞台風によるものと見られ、結果、常闇状態が出現した。それを大海人皇子方は「神風」と言葉巧みに利用し、心理作戦で戦を勝利へと導いたのである。

天雲を日の目も見せず 常闇に覆ひ賜ひて

天照大神の天の磐戸籠り状態の再来と喧伝し、心理戦を行った。定めてし水穂の国を 神随ら太敷き座して

戦いの勝利と現人神としての天武天皇の治世をいう。

### 【枕詞「神風の」の成立】

上代の枕詞「神風の」は全て地名「伊勢」に冠する。この枕詞は『古事記』や『日本書紀』の倭歌、『風土記』(逸文)、『萬葉集』に見られる。これらは壬申の乱の時の「神風」の語が契機となつて成立した枕詞であり、それが『古事記』『日本書紀』の編纂時に取り込まれ、また萬葉歌の表現にも取り込まれている。

(廣岡義隆「枕詞「神風の」の成立」)

\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*—\*

プリント⑥の「聖武天皇行幸從駕における萬葉歌」に関する文献。

廣岡義隆『行幸宴歌論』(和泉書院、二〇一〇年三月、6・一〇二九〜一

〇三六の八首を考究した本)。榎村寛之氏、山中章氏と廣岡の鼎談「三重の萬葉と歴史」及び「倭歌暗黒の時代」(廣岡)を付載。

影山尚之論文は「聖武天皇「東国行幸時歌群」の形成」(『解釈』三

八卷八号、一九九二年八月)、新沢典子論文は「歌に示された聖武朝史」(『名古屋大学国語国文学』九七号、二〇〇五年十二月)。

【聖武天皇行幸從駕における萬葉歌】

十二年庚辰、

かのえたつとし

冬十月に大宰少貳藤原朝臣広嗣の謀反けむとして発軍するに依

みかじかたが

いくさたち

よ

り、伊勢国に幸しし時に、

いでま

かりみや

うちどねり

河口行宮にて、内舎人大伴宿祢家持の作れる歌、一首。

かはぐち

のべ

いほ

よ

ふ

いも

たもと

おも

河口の野辺に慮りて夜の歴れば妹が手本し念ほゆるかも (6・10・29)

おほみうた

天皇の御製歌、一首。

妹に恋ひ吾の松原ゆ見渡せば潮干の瀧にたづ鳴き渡る (10・20)

いも

こ

あ

まつばら

みわた

しほひ

かた

な

わた

右の一首は、今案ふるに吾松原は三重郡に在り。河口行

あかまつばら

さ

けだし

おはしま

つく

宮を相去ること遠し。若疑朝明行宮に御在しし時に製ら

ひと

あやま

す御歌を伝ふる者の誤れるか。

丹比屋主真人の歌、一首。

おく

ひと

おも

しで

さきゆふと

さきく

おも

後れにし人を思はく四泥の埒木綿取りしでて好住とそ念ふ (10・31)

かむが

このうた

このみゆき

しがい

ゆゑ

右、案ふるに此歌は此行の作には有らじか。然言ふ所以は、

みやこ

かへ

おほみともせし

大夫に勅したまひて河口行宮より京に還し從駕令むる

うた

つく

ことなし。何にして思泥埒にて作歌を詠ること有らむや。

いか

さざらのかりみや

狭残行宮にて、大伴宿祢家持の作れる歌、二首。

おほきみ

みゆき

まにまわぎもこ

たまくらま

つき

へ

天皇の行幸の随吾妹子が手枕巻かず月そ歴にける (6・10・32)

みけつくにし

あまな

まくまの

をぶね

の

おき

こ

み

御食国志麻の海部有らし真熊野の小船に乗りて奥へ榜ぐ見ゆ (10・33)

たぎのかりみや

あづまひと

美濃国の多芸行宮にて、大伴宿祢東人の作れる歌、一首。

いにしへ

ひと

い

く

おいびと

を

い

みつ

な

お

たぎ

せ

古ゆ人の言ひ来る老人の変若つと云ふ水そ名に負ふ瀧の瀬 (10・34)

大伴宿祢家持の作れる歌、一首。

たどかは

たぎ

きよ

いにしへ

みやづかへ

たぎ

の

へ

田跡河の瀧を清みか古ゆ宮仕けむ多芸の野の上に (6・10・35)

ふはのかりみや

不破行宮にて大伴宿祢家持の作れる歌、一首。

せきな

かへり

うちゆ

いも

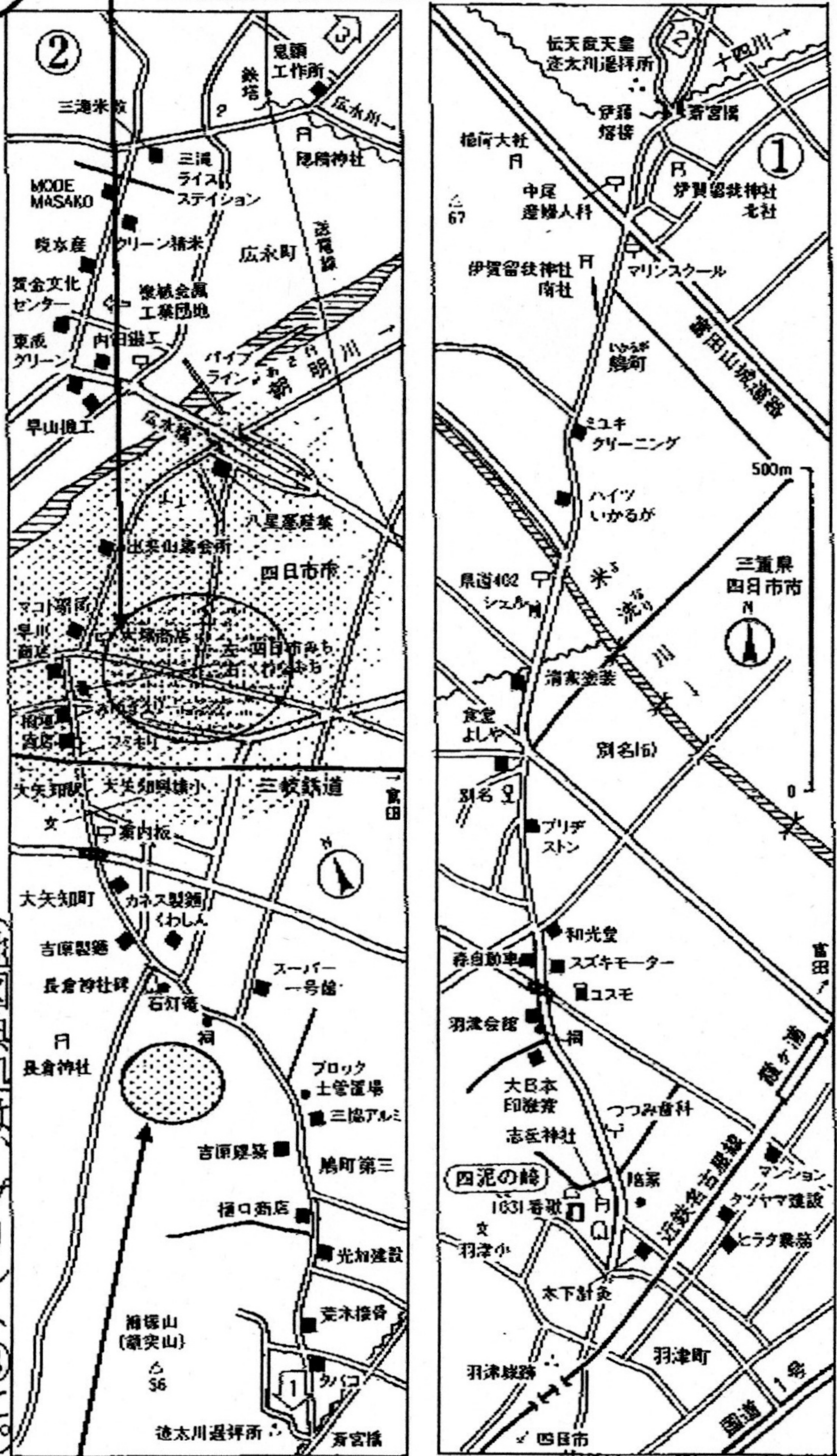
たまくらま

ね

関無くは還にだにも打行きて妹が手枕巻きて宿ましを (6・10・36)

7

ささら  
狭残の地  
楯円に限ることなくその周辺域を含む。



国名・播<sup>ハ</sup>磨<sup>ン</sup>——は<sup>り</sup>ま  
地名・平群<sup>グ</sup>ン——へ<sup>ぐ</sup>り  
持統・讚<sup>サ</sup>ン良<sup>良</sup>——さ<sup>ら</sup>ら  
地名・狭残<sup>ザ</sup>ン——さ<sup>さ</sup>ら

\*廣岡が「狭残」の二字で「ささら」と訓み得ることを指摘。

(岡田登氏「壬申の乱及び聖武天皇伊勢巡幸と北伊勢」  
皇學館大学『史料』一九一〜一九二号、二〇〇四年六〜八月)  
(廣岡義隆「狭残行宮における大伴家持詠について」『三重大学日本  
語学文学』一六号、二〇〇五年六月。『行幸夏歌論』所収)  
(その後、『萬葉の散歩みち・下』新典社新書一〇五頁〜でも言及。)



神宮文庫蔵  
『諸国御厨御園帳』  
傍線は、今回の  
書き込み。

\*岡田登氏が歴史地名「佐々良井」を指摘。

狭残——「読み」も「所在」も不明な地——諸説が林立。

狭残行宮にて、大伴宿禰家持の作れる歌、二首。

おほきみ みゆき まにまわぎもこ たまくらま つきへ  
天皇の行幸の随吾妹子が手枕巻かず月そ歴にける (6・1031)  
みけつくにしま あまな まくまの をふね の おきこ み  
御食国志麻の海部有らし真熊野の小船に乗りて奥へ傍ぐ見ゆ (1033)

\*以下は、次の二首に絞って見てゆきます。

地図典拠は『ナニハア』(2017)。

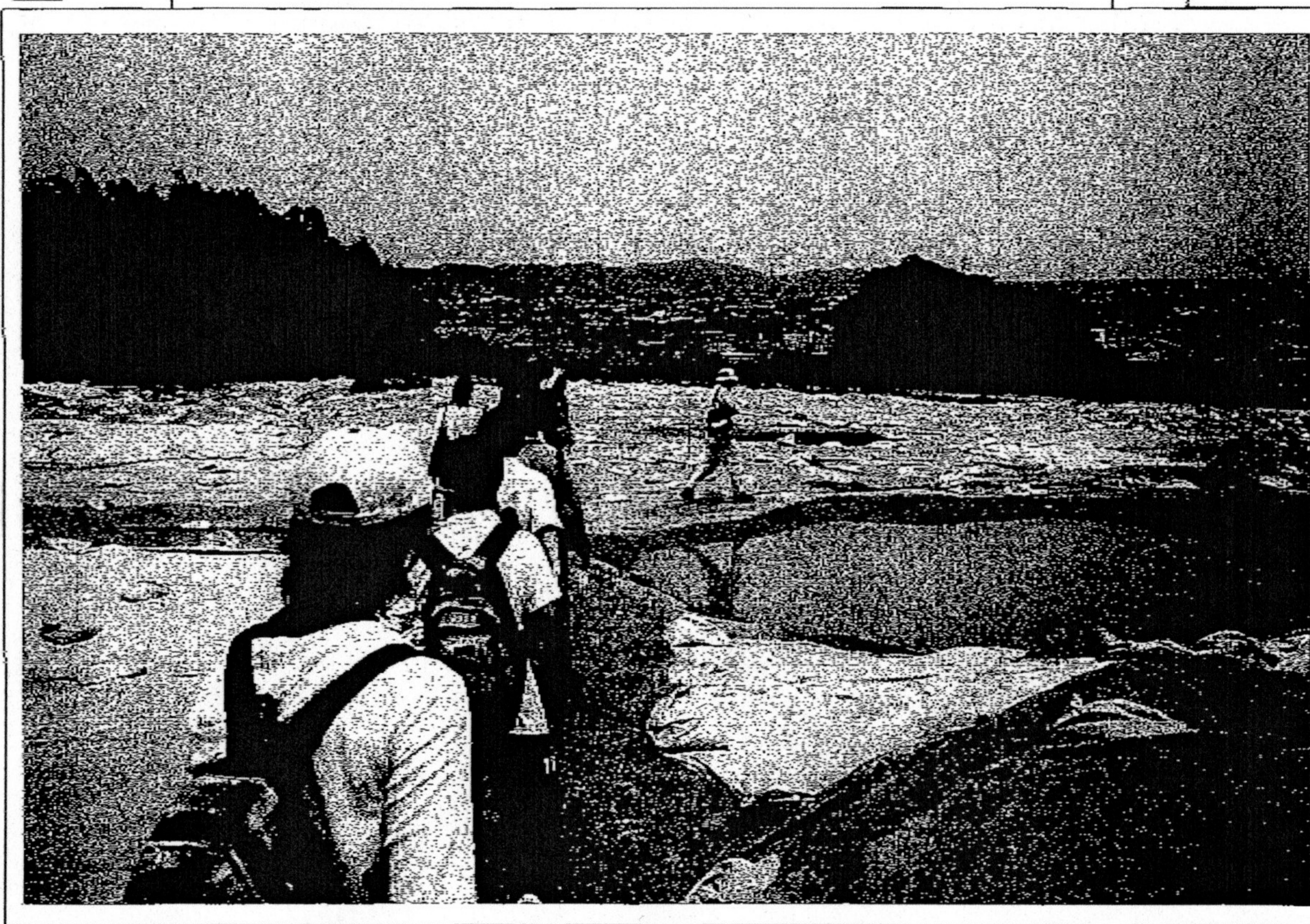
久留倍遺跡

## 【久留倍遺跡と萬葉歌】

⑦の地図2面と右の地図は三重大学万葉旅行の会による「壬申の道「四泥の崎」コース」(『ウォーク万葉』28号、1991年10月)による。

プリント⑦の「狭残」の地及び「久留倍遺跡」の位置は、今回の書き込みによる。

写真は発掘中の久留倍遺跡。2004年5月30日



撮影：杉山美穂



- \*久留倍遺跡の地は丘陵地の頂きを削り取った造成地。
- \*展望が極めて良く、伊勢湾が眺望出来る。
- \*聖武行幸コースで、海を望むことが出来るのは久留倍遺跡の地。
- \*大伴家持の一〇三三番歌の景が成立するのは久留倍遺跡の地。
- \*その歌が披露されたのは狭残行宮の宴に於いてである。久留倍遺跡と狭残行宮とは、必ずしも一致しなくても良い。